

幻想世界魔物大全4

洞窟生物

表紙イラスト モスクワ
編集・発行 白森書房



ゴ
ブ
リ
ン

ゴブリン

危険度：C

出現場所：森、廃墟、その他多数

知能：低い

特殊能力：なし

邪悪な小人。

特筆する能力こそないものの、異常な生命力と繁殖力を持つ。その気性は極めて欲望に忠実であり、快樂の為であればあらゆる行為を厭わない厄介な存在である。あらゆる場所に生息しており、知能は人間に肉薄するが、本能——特に三大欲求を満たすことにのみ使っている為、狡猾ではあるが知的はなく短絡的といえる。従って一匹の危険度自体は低いが、群れた際の脅威は侮れない。

ゴブリンの定義は諸説あり、精霊とも、妖精とも、幽霊とも、或いはドワーフの一種であるとも言われているが、源流を辿るならいざ知らず、現世に蔓延っているゴブリン達概念を定義づけることは不毛と言える。理由は前述した異常な繁殖力にあり、彼等は種族を問わず性交に耽る為、混血が進みきつてい

るからだ。

遺伝子の混濁からか、雄は醜い瘤を蓄えた正視に堪え難い外見をしている。しかし真逆に雌は魅力的で、美少女と呼べる外見に加え、性的魅力を助長する部位に限り成人女性顔負けの肉付きをしている。学者の一説によれば彼等の外見は繁殖を促す為の進化であり、雄は他種族に無理やり種を付けければ良い為に醜く、雌は他種族の雄を誘う為に魅力的な外見をしているというのだが、真偽は定かではない。

彼等への対処としては定期的な『駆除』が最も現実的である。

自分にとって大切な女性が彼等の粗暴の対象にされ、尊厳を踏みにじられ、腹を膨らませる憂き目に会いたくないのであれば、決して『駆除』を躊躇ってはならない。彼等は理性を持たぬ獣なのだ。

遭遇した際は決して耳を貸さず、殺す事が肝要である。

例えばそれが、可愛らしいメスゴブリンであったとしても同様だろう。



甘美なる墮落の沼

文 ま に
挿絵 フクロウ



幻想世界魔物大全

登場人物紹介

青年

田舎村に住む心優しい剣士。 剣の腕は確かなのだが、生まれつきの心根の優しい性分が災いし狡い手に弱く、稽古試合で格下の相手に遅れを取ることも多い。中性的な外見もあいまって、苦勞が絶えない。

ハク

駆除されたゴブリンの群れの生き残り。洞窟に隠れ潜んでいた所を訪れた青年に助けを求めるが……
小柄ながら非常に肉感的。
愛らしい少女。

甘美なる墮落の沼

— —

ゴブリンという種族は人間にとって、害獣のようなものだ。

彼等は体軀こそ成体で *young* 弱と人間より小柄ではあるものの、その外見は人間と殆ど相違ない。知能も高く、本来であれば人間達が無意識に仲間意識を抱ける程度に近い存在だと言えるだろう。

しかしどれだけ似通っていても、人間がゴブリン達と友好関係を築くことは極めて難しい。

何故ならばゴブリンとは救い難いほどに享樂的だから。

極めて本能に忠実なのである。

自分達の欲望を満たす為ならば、騙すし盗むし鬪るし殺す。さながら人間の悪辣な部分のみを抽出して精製したような種族性に、人間達は長い歴史の中でどれだけ被害を被ってきたのかわからない。

しかも彼等は、それこそ害虫が如き異常な繁殖力さえ持っている。

同種族間での性行為は勿論、異種族の種でも孕み孕ませを行える。

高い知能と強い性欲。

欲望の権化と呼ぶに相応しい彼等に対して、人間が出来ることなど一つしかない。

『駆除』。

自分達の生活圏にゴブリンの姿を見つけたら最期、巢穴ごと根絶やしにする以外に人間がまともな暮らしをすることなど出来はしないのだ。

人間にとって、それは常識だ。

(……)

それでも彼は悩んでしまう。

とある洞窟の只中。

暗闇を片手に持つランタンで照らす彼の表情は苦い。

その瞳には、自分の前に現れた異物が写っている。

力なく、その場に座り込んでいる影。

ただし——どうしようもなく、耳が尖っている。

「うう、ぐすっ……こっ、殺さないで下さい……お願い……」

「い、いや、そのっ……」

——紛れもなく、メスゴブリンだ。

青年はゴブリンという種族をその目で見たことがなかったが、それでも強く確信していた。

涙目で青年を見つめるそれは、一見すればボロ布に身を包む不憫な美少女だ。顔立ちは整っており、快活というよりは大人しめで可憐という印象を受ける。ロングのプラチナブロンドはふんわりと柔らかく、いかにも女の子らしいといった風貌が一層青年の良心に呵責を与えていた。

ともすれば、洞窟に迷い込んで疲弊した良家の女の子と見紛う姿である。

しかしそんな彼女の姿はあまりにも特徴的で、実物のゴブリンを見たことがない青年でさえ、彼女がゴブリンであることは疑わない。

何故なら灯に照らされる彼女の身体は——人間の女の子とは見間違いない程に、性的なのである。

(話には聞いていたけど……メスゴブリンって本当にこんな、蠱惑的な……)

怯えながらに青年を見つめる瞳は愛い。涙を伝わせるほったのぷにぷに感や、ポロ布から覗くイカ腹の滑らかさも、紛れもなく未熟さを感じさせる。

しかしその胸は、成人女性顔負けに大きい。

下半身はむちむちとしている、所謂安産型の肉付きだ。

その上、陰気な洞窟にありながら、彼女の肌艶はとてもしやらしく、ランタンの灯を受けて血色良く艶めている。見るからにキメ細やかで、触れるどころか見下ろしているだけでも視線に吸い付いてくるかのようだ。

言うなれば、少女の可憐に性的な肉のみをたっぷりつけた魅了。

人間の女の子では到底有り得ない、性的魅力の塊が如き外見なのだ。青年が人間と間違えよう筈もなかった。

(これなら、その、増えるわけだ……ゴ布林……)

いかに禁忌と分かっていても、メスゴ布林との性交を犯し、繁殖を促す愚かな人間がいることは青年も聞いていた。

話ばかりでは理解こそ出来なかったものの、こうして実物を見れば分かる。繁殖を滞りなく行う為とされる挑発的な身体つき——禁忌を犯す男が絶えない

わけだ。

青年自身、女性に免疫がなければ経験もない分、目のやりどころに困ってしまふ。

「お願いします剣士様……まだ、死にたくない……」

無意識に高揚を感じていた青年はしかし、悲壮な命乞いに現実へと引き戻された。

「っ……き、君はゴブリン、なんだよね？」

「は、はい……でも違うんです、私は何も……皆、殺されて……私はただ、一人っきりでこの洞窟に身を潜めて慎ましく暮らしているだけなんです……」

「……そう、なんだ」

この洞窟の近くにある青年の村では、他と同じく定期的に『ゴブリン狩り』が行われる。青年自身は年齢の都合で参加をしていなかったのだが、つい一ヶ月ほど前にそれは行われ、大量のゴブリンを発見、駆除するに至ったらしい。(つまりこの子はその生き残りというわけか……)

青年はメスゴブリンを見下ろしたまま、複雑な感情から痛烈に目を細める。

彼女は俯き肩を震わせている。

可哀想には他ならない。出来ることなら助けてあげたい。

しかし、彼女はあくまでゴブリンなのだ。一匹たりとて生かしてはならない、ゴブリンはそこから何百にも繁殖し、人間に害を及ぼす存在であるのだから。同情に流されてはならない。人間として、剣士として、ゴブリンを駆除することは当然の責務だ。

特に、自分は気をつけなければならぬ——青年は強く思う。

青年は、生まれつき心根の優しい性分だった。お人好しと言ってもいい。

その性分に中性的な外見もあいまって、大分苦勞もしてきた。善意につけ込まれ、都合よく扱われることはしょっちゅうだったし、舐められているし、言ってしまうえば損ばかりしている。それでも生まれつきの性分は変えられず、腐らずに生きているわけなのだが。

この状況で、そんな優しさはどう考えても毒だった。

第一、もしゴブリンを生かしたことを知られれば青年自身の立場も危うい。青年にはなんの利益もない。

——自らの手で、殺さなければならぬ。

「……ねえ、君」

小さな肩が、びくりと震えた。

青年は強く下唇を噛み締めた。胸が緊張にせり上がる。

殺せ。幾ら害がなくても殺すんだ。もし騙されたりしたら、自分の命さえ危ういんだ。

だから、殺すしかない。

もし、万が一、彼女が本当に優しいゴブリンであつたとしても——

「……君が人間に迷惑をかけないというのなら、僕は君を殺す気はないよ」

「……え？」

——ああ、何を言っているのだろう。

青年は同情に流された自分の愚かさを呪う。

どれだけ、これで苦勞をしてきた。善意は踏みにじられるものだ。人間相手にさええそうなのに。

だがそれでも、自分の言葉によって上げられたメスゴブリンの顔を見たら、

もう言葉の撤回など出来なかった。

「ほ……本当ですか？ 助けてくれるんですか？」

依然涙をぼろぼろと零し、しかしメスゴブリンの表情は希望を灯している。希望と絶望を両方抱いたその顔を見て再び絶望に突き落とせるほど青年は自分割り切った性格でないことをよく分かっていた。

「……うん、大丈夫だよ。僕は君を殺さない」

観念し、頷く。

「っ……はっ、はいっ。ありがとうございます、優しい剣士様っ！ ううっ、本当につ、ありがとうございますっ……」

「う、うわっ、ちよつと……」

懐に飛びこんできたメスゴブリンに、青年は一瞬奇襲の危険を感じた。

だがしかしそれは杞憂で、メスゴブリンはただ青年に抱きつき泣き始めただけだった。

その力はいくまでか弱く脅威は感じない。

それどころか密着する彼女の身体は小さい癖にやたらと肉感的で、擦り付け

られる度にむちつくメスゴブリンの感触に好色さえ覚えるほどであった。
青年の股間にじんわりと芯がこもる。

潰れて谷間の盛り上がる乳肉も、肉づきのいい肢体も、全てが青年に状況不相応な性欲を感じさせていく。

(ば、馬鹿、堪えなきや……)

青年は必死に自制する。

やがてメスゴブリンは泣きじゃくりながら離れ、青年は何とか事なきを得た。

「……私、ハクって言うんです……一人つきりで、とつても心細くて……」

小さなおての甲で健気に涙を拭い、彼女——ハクはおずおずと言った。

「ハク……じゃあえーつと、ハクちゃんは特に、人間に害を与えたりする気はなくて、ただここで一生懸命生きてただけ、なんだよね」

「はい……私、そういう乱暴なの嫌いで……絶対悪いこともしません……」

「……そっか」

重要なことだ。一応改めて確認したが、この様子だと心配はいらないらしい。

「じゃあその、本当は駄目なんだけど……僕は君のことを助けるよ」

「くっありがとうございませしゅ……」

「あっほら、泣かない泣かない。恐かったよね、もう大丈夫」

つぶらな瞳を涙で揺らすハクの大きな頭を撫でて、青年は出来るだけ優しく微笑みかけた。

「でもごめんね、この辺りはゴブリンを嫌う人間が多いから、引越してもらおうことになっちゃおうと思う」

「は、はい」

「僕もそのお手伝いをしたいんだけど……」

「あ、それじゃああの、巣穴まで一緒に来てもらえますか？ 少しなんですけど、荷物とかあって」

「……うん、そうしよっか」

たった一匹の巣穴はさぞかし寂しいことだろう。

一応のこと監視も兼ね、青年はハクの提案を承諾した。

「ありがとうございますっ！ それじゃああのっ、一緒に」

「うん、さ、どこに行けばいいのかな？」

「はい、こっちですっ！」

「はいはい」

ハクの指差す方向へ、青年は歩き出す。

ハクはそんな青年の腕に横から手を回してくっついてきた。

「えへへ、剣士様はお優しいんですね……私、あの、このまま身ひとつで放りだされちゃうのかなって思っていました」

「うん、まあゴブリンも色々大変だろうしそんなことは……とにかく、もう人間の住む場所の近くに来たらいけないよ」

「はいっ……はあ、本当に良かったです……」

(……まあ、この子なら見逃しても大丈夫、なのかな)

ほっと安堵しているハクは、伝えられているゴブリンとは大分印象が違う。

素直で純真、嘘をつける性格でもなさそうだ。遠くへ逃がすだけなら問題はないだろう。

青年は徐々に罪悪感が薄れていくのを感じていく。

そうなる唯一の懸念は、腕に当たるハクの豊乳だ。

(うう、めっちゃ柔らかいっ……歩く姿もお尻むちむちぷりぷり振ってなんか挑発的だしっ……)

「……？ どうしましたか？ 剣士様？」

「いや、なんでも……」

(こんな状態で巣穴に行くのか……)

——間違いだけは、起こさないようにしなければ。

青年は悶々としながら、洞窟の奥へと進んでいく。

「あ、あそこを曲がったら巣穴ですっ」

洞窟を潜って行って暫く経った頃、ハクは幾度目か分からず現れた道のうねりを指差して言った。

「へえ……しかしこの洞窟、こんなに深く入り組んでいるとは思わなかったな」
道理で村の大人達がゴブリンの巣穴を見つけることが出来なかった訳だ。一見小さな洞窟の、入ってみればどれだけ底無し迷宮だったろうか。今一度入り口から此処へ辿り着こうとしても間違いなく不可能だろう。

先のゴ布林狩りは大分幸運の産物であつたらしい、と、息を切らしつつ終着点へと歩む青年の足取りは軽い。ともあれ、後は荷物を持ち出してハクを送り出せばこの事件は終わるのだ。村の人間達には洞窟の深さを伝えて後日大規模な捜索隊を出してもらえば全ては丸く収まると思えば、疲労した足取りも軽くなろうというものだろう。

(よし、さっさと終わらせちゃおう)

ハクと仲良く手を繋いだまま、青年は安堵した表情で道のうねりを曲がった。そして思わず、目を丸くしたのである。

「……あれ？」

開けた空間が青年の目の前に広がった。

まばらに置かれた松明に照らされたそこは、巢穴という形容に相応しくみすぼらしい空間だった。

湿った岩肌の凹凸が灯に煌き、いかにも洞窟といった風だ。

地面には布や布団が無造作に敷かれており、そこかしこにかび臭そうな食料袋と思しき袋やボロけた家具がぼつぽつと転がっている。

人間のモノを奪って生活していることがありありと分かる光景である。それ自体に驚きはない。

問題は、そんな巢のあちこちから、青年を見定める視線があるということだ。つた。

「あつきたきた、本当に雄の人間だあ♡」

「わゝ、人間なんて久しぶりだねえ♡」

——居るじゃないか。

青年は馬鹿みたいに立ち尽くして、思う。

「うわあ、美味しそう♡ 私この人間好みかもお」

「これは楽しいことになりそうだねあ♡」

全て、妖艶な女の子達だ。

皆が小さい。

皆が豊満な乳肉を実らせている。

身にまとうボロ布から露出した肢体は、どれも例外なくむちむちと肉がつき、紅潮し、巢穴に灯った松明の灯で艶々としている。

誰もが種付け頃の雌。

紛れもない、全員が純然たるメスゴブリンが、軽く十数匹はいる。

(……あれ、なんで?)

青年は鳩が豆鉄砲でも喰らったような心地だった。

思考が上手く追いつかない。

(ハクちゃんは確か、自分以外全員駆除されたって言ったのに……?)

「くすくす……ハクく、良かったねえ」

「見つけたのがこおんな……くす♡ 平和ボケしたおにーさんでえ♡」

——向けられた嘲笑に、ようやく合点が行った時はもう遅かった。

「くっ——」

つまり、自分は騙され——

「——っうわっ!?!」

——たのだ、と。

思い、剣を握ろうとするより先に、繋いでいた手をひねられ気付けば視界がぐるりと回っていた。

投げ飛ばされたという認識と殆ど同時に、地面が背中を強く打つ。星の見えるような衝撃に青年はくらつき、次いで腹部に重みが乗り息を詰まらせた。

「は、ハク、ちゃんっ……」

「剣士様……♡」

ハクは馬乗りになって、優しい笑顔を青年へと向けていた。

まさかこの子に転ばされたのかと、信じがたい青年の眼前で、ハクの笑顔は一層蕩け。

「えへへ……♡」

「……ばあ……っか♡♡♡」

——それは一瞬にして、男を見下す小悪魔染みた妖笑へと歪んだ。

「えっ、えっ……?」

「んも、チヨロすぎるよ、おにーさん♡ だめだめえ、ゴ布林なんて信用しちゃあ♡ 殺しておかなきゃ♡ 隙をつかれてえ、襲われちゃうゾ♡」

これが本当にあのハクなのだろうか。

青年を見下ろす表情は困ったような、嗜めるような。とにかく悩ましく、これまでの気弱さなんて一切ない。腰を曲げ、青年の胸板を小さなお指でくりくり舐っている。

外見こそ変わらさず可憐だが、立ち振る舞いはまるで男を漁る売女のような。

(――逃げなきゃ)

極端な変貌への対する驚きはそのまま危機感へ変わり、青年は無意識に彼女を振り払おうとする。

「――あ、れ？」

一応はやりすぎないように。

あくまで甘い青年のそんな思いやりは、しかし杞憂に終わった。

なにせ、動かない。

身体が一切利かないのだ。

「やんやん♡ むりむり♡ もく動けませえん♡ 残念でちた〜お馬鹿さ〜ん♡ ごめんねえ♡ 暴れられると危ないからあ、簡単な魔法で伝えといて、皆に魔香を焚いてもらってたんだけ♡ どんな屈強な人間の雄でもお、これを嗅いだら一発アウト♡」

「なっ、え——!?」

確認するように青年はもがこうとしたが、それさえ出来はしなかった。

精々首を起こすか四肢の末端を少しだけ動かせる程度で、身体がゴムになっ
てしまったかのようだ。

「んね♡ おに〜さんは、もうよわよわで〜す♡」

青年から血の気が引いていく。

本格的にまずい。これでは彼女達のなすがままだ。

冷や汗をかく青年に、ハクは顔を近づける。

「……私い、ほんつと〜にホツとしたんだよお？」

ひそひそ囁いた途端、彼女の表情に出会ったときのか弱さが戻った。

「私達って弱いから、人間と戦っても絶対勝てないし……洞窟の中でおに〜

さんと会った時はあ、死んじゃうなああって思ったの。すっごくすっごく、焦ったんだよ？」

悲しそうに視線を伏せるハクは、青年の耳元へと唇を寄せる。

「でもね……」

「……おに～さんがちょろ～い性格で、ちょ～助かっちゃった♡ 死ね間抜け♡ ぷ～っくすくす～っ♡」

そうして囁く台詞はやはり、青年を心底小馬鹿にしきっている。

「ううっ……」

「ありがとね～おに～さん♡ 殺さないでくれて♡ 私を助けようか悩んでる時のおに～さんのおかお♡ とおってもお、素敵だったよ♡ 馬鹿みたいで♡」
(……なんてことだ)

青年もいよいよ実感するしかなかった。

全ては彼女の狡猾な演技だったのだ。

自分の優しさなんて一切彼女には響いていない。損得勘定ではなかった。寧ろ自身の身さえ危うくなる決断だった。しかしそれは、彼女にとっては付け入る隙でしかなかったのだ。

青年は己の甘さを悔いた。

結局、いつもの自分と同じだ。心を許して、つけ込まれて。安易な情など抱くべきではなかった——。

(ここでもう、終わり、なのか——)

「……あれあれえ、どしたのお、おめめなんか瞑ってえ。もう観念しちゃうの?」
苦しく、恐い。やるせなさもある。

けれど自業自得の帰結だと、青年は腹を決めた。

「ふーん。騙されたーって顔真っ赤にすると思ってたのにい。優しさの押し売りする人って裏切られると勝手に切れるしい、おにくさんもそんなタイプだと思っただけどなー」

「……殺す、なら……早く、殺してくれ」

「え? やだなく、殺すなんて♡ 恐いこと言わないでよお♡ 私達そこまで

する気はないよお？」

「……へ？」

青年は思わず閉じた目蓋を開く。

「幾ら何でも、命を助けてくれた人を殺したりなんてしないよお」

「え、でも——」

——青年を逃がしたら、村の人間達にこの洞窟を知られてしまう。君達にはリ
スクしかない筈なのに何故？

出かけた台詞を、青年はすんでのところで飲み込んだ。

余計なことを言う必要はない。助けてくれるのなら万々歳だ。

——そう思う青年は、やはりどこまでも甘かった。

「だってえ、折角おにーさんみたいになちよっろーいザーメンタンク精液貯蔵庫を捕まえたんだ
からあ、一生飼いで殺して精液ぶっこ抜くに決まってるじゃん……♡」

理解し、青年はぞっとした。

「えっ——」

「……あー、ひどーい、なにその反応——」

ハクは不満げにほったたを膨らませる。

そして、青年にぎゅっと抱きついてきた。

「う、あっ——」

「そんなに……異種族との子作りライフ送るの、いや？」

囁くハクは、火照った表情で甘い吐息を洩らす。

小さな体軀に不釣合いの爆乳がつかたての餅みたいに胸板に押し潰れるのを筆頭に、人間の女の子では到底ありえないむちむち感が青年へと絡み付いてくる。

紅潮した胸の谷間が、間近で艶めき潰れている光景は凄まじい。

メスゴブリンの魅力の髓に、だからこそ青年は恐れて止まない。

「もーおにーさん酷いなー♡ でもでもごめんね♡ 私達、オスゴブリンがいなくなるとしても欲求不満なの♡」

だって、彼女達の考えることは殺される以上に残酷な行為なのだ。

ハクは、ここにいるメスゴ布林達はつまり、青年の精で繁殖しようとして
いるのだ。

「お願いだ、や、やめてくれ……」

そうなら、もう青年の甘さが招いた不幸で終わる問題じゃない。

自分の甘さのせい、多くの人間に迷惑がかかる。善意が報われないどころ
の話じゃない。最悪以上の結末だ。

「え？　なんでえ？」

青ざめる青年を、ハクはじいっと見つめて、笑う。

「そんなに嫌ならあ、ぴゅっぴゅっぴゅしないように我慢すればいいだけじゃん♡
私達優しいと思うけどなくだっておに〜さんを選択肢与えてるんだもん」

「っ……！」

こともあろうに、ハクの台詞は責任の全てを青年へと押し付けるものだった。

「ここにいる超発情状態のメスゴ布林全員がおちんぽ責めたてるけどお……
頑張って耐えてね♡ 責任感の強い、おに〜さん♡」

「やっ、やめっ——あっ——」

青年に、数多のメスゴ布林達が擦り寄ってくる。
どれだけ願おうとも、身体は動かない。

—二—

ぶぽっ♡ ぶぽっ♡ ぶぽっ♡ ぶぽっ♡

洞窟内に、これみよがしな音が響き渡っていた。

淫猥の髓を詰め込んだ音である。

ねちっこおく、粘膜のねっとり絡みつく。

執拗に水音を立てて啜りたてる。

でっぱりを、何度も何度も弾きたてる。

それ等は複雑に絡み合い、鳴り渡る度に無骨な洞窟を淫靡な趣でいっぱい染め上げていた。気付けばどんな風俗よりもいやらしく、空間は搾精一色にな

っている。

青年は音の鳴る度に、情けない声を何度もあげていた。

そうしてこの拷問を必死に耐えながら、ただただ強く、思っていた。いやらしい。気持ち良い。天にも昇るようだ。

——嗚呼。

——目の前に広がる光景が、歪な化物達であったのならどれだけよかつただろう。

「……ほおら、もっとしつかり、見て♡」

青年の願いも虚しく、膝枕をするハクに促されて見やる光景は——まるで桃源郷のようであった。

「ほらほら、お兄さんだめですよ、そんな気持ち良さそうな顔をさせちゃあ……♡」

「そんな簡単にぴゅっぴゅしちゃったらつまらないんだからさ、もっとちゃんと耐えてよね」

——全裸の自分に、密着して乗り出すむちむち美少女が二匹。

どちらも白い肌を艶めかしく紅潮させて、左右から青年を挟み込んでいる。かたやロングヘア、底知れぬ笑みを不気味に浮かべ。

かたやショートヘア、可愛らしくぷんぷんと怒り。

対照的な二匹はしかしどちらも、豊満な乳肉を押し当て、むっちり肉づきの良い安産型の下半身を摺り寄せてきている。幼く可愛らしい印象を受ける顔立ちであるというのに、身体は強烈に種付け欲をそそる。

エロスの塊と言えるそんな二匹が発情面で顔を近づけてくる、それだけでも射精モノの興奮が押し寄せてきて、青年は視線を逸らそうとするほどだった。

しかし、逸らすことは叶わない。

迫る二匹を丁度縁とし、中央奥——つまり青年の股間部からこちらを見つめてくる眼光が、あまりに強烈な引力を孕んでいたからだ。

「——ぶびっ♡ ぶびっ♡ ぶっぽ♡ ぶっぽ♡」

猟奇的なまでの上目遣いが、音の度に上下する。

四つん這いになって肉棒をしゃぶるメスゴブリンがそこにいた。

お尻を突き出し、ちっちゃい身体で股間に奉仕をしているというのに、その

表情はまるっきり発情をぶつける捕食者なのだ。ほっぺたを紅潮させ、搾り殺してやるという目で青年を見つめて離さない。

彼女がそのドスケベ面で顔を上下させる度に、下品な音は鳴り響く。

「ほらほら、しっかりフェラチオ攻撃我慢しないと……♡」

「も〜、こら〜！ メスゴブのちっちゃ〜いおうちとちよおとせつくすしてただけでそんな顔してたら、人間さん達に怒られちゃうよ〜！」

こんな拷問があるだろうか。
甘い吐息が顔を撫でる。

可愛らしいお声と欲望全開のフェラチオ音が、絡み合って鼓膜を舐る。

幼さと成熟の同居した種付け特化ボディがすりすり密着して止まない。

ぷにぷにほっぺた。甘く線の蕩け合う胸の谷間。むちむちの太腿。視界に入るどれもが淫靡に火照って艶めき、超一級の魅了だ。

全てが可愛く、いやらしい。

メスゴブリンのハーレム搾精は破滅的なまでの極楽だ。



「ほらほらあ、おに〜さん、そんなつらそうな顔しないでよ〜♡」

「ううっ、くっ……♡」

耐え切れず上を向けば、膝枕をするハクが嘲笑混じりの困り顔で見下ろしている。

ただでさえいやらしい表情は、胸の谷間の向こうから見えることにより青年の興奮を殊更そそり立てる。

「折角さあ、まずは赤ちゃん出来ないえっちで緊張をほぐしてあげてるんだから♡ 数でも手加減してるんだしい、リラックスしてびゅっびゅっしようよ、ね♡」

「ううっ、あっ、ぐっ……」

——確かに、口淫では子供は出来ない。

十数匹いるメスゴ布林達は、青年に群がる四匹以外は遠目に見守り笑っているだけだ。

しかし、青年は例え口淫でも射精をする気はなかった。一度快楽を許容すればたちまち心まで墮落してしまう気がした。それほどにメスゴ布林達のセッ

クスアピール全開なむちむちっぷりは凄まじい魅力だった。

「……もー、そんな無理やり我慢してー。無駄な努力だと思っけどな」

「……ふふ、でも私は、お兄さんの行動は正しいと思いますよ♡」

「おふっ」

礼儀正しい優しい声に、次いで快感が胸元を走る。

右を陣取るメスゴブリンが乳首を弄ってきていた。

「だって、我慢は大事ですもんね」

にっこり微笑み、ちっちゃなお指で乳首をくりくり弄りたてる。

「ふっく、おっ……」

「ふふ、そうやって、しっかり我慢しないと♡ 後に続くもっといやらしい搾

精を我慢出来よう筈ありませんもの♡ 私はお兄さんのこと、応援しますよ

♡

「えー、そうかな。私はそうは思わないけど」

「あっあっ」

今度は左を陣取るメスゴブリンが、不満げな顔で相方を見つめつつ乳首を摘

んできた。

指先で器用に乳首を弾きながら、青年のほうへと視線を向ける。

「私は早く種付けえっちしたいし、無駄だよ無駄無駄。そりゃ簡単すぎてもつまらないけどさ、もう飽きてきたし……もう、おにさん早くびゅっぴゅしてよ」

「ふふ、まあまあ。時間は無限にあるんです。しっぽり楽しみましょうよ」

「うう、早くせつくすしたい……」

「ああ、あつ、あつ——」

話し合うメスゴ布林達に挟まれて、両乳首をくりくりなぶられる。

技巧に富んだ責め手は産まれた快感をそのまま下半身へと流し込み、まるで射精のスイッチであるかのように口淫の快感を底上げてくる。

「……さ、お兄さん。蕩けるフェラチオ、しっかり我慢して下さい♡」

囁きに合わせ、ハクの両手が青年の頬を挟んで動かし、視線を誘導する。

メスゴ布林の四つん這いノーハンドフェラチオを、両の瞳にしっかりと映させられる。

「ほら……唾液でぷるっぷるの唇が、カリ首いっっぱい弾いちゃってますね……」

優しい声色の紡ぐ囁きは、しかし他の二人以上に嗜虐的だ。

「重点的にそこばかり、ほら、ぷほん、ぷほんってえっちな音させてますよ……♡ 人間の女の子くらいちっちゃくて可愛いメスゴブリンが、えっちなお顔でいっっぱいぷぽぽ……カリ首均しちゃうくらい、唾液で滑らせぷぽぽぷぽ……♡」

「ああっ、あっ、あっ——♡」

目の前の光景が、囁きによって一層はつきり輪郭を宿す。

上目遣いを外すことなく、フェラチオゴブリンは小刻みに素早く顔を上下させる。

艶めかしい唇で、カリ首をなぞるように何度も上下する。

精液をよこせといわんばかりに睨みつけ、反応を観察しながら、やがて彼女は一気に喉奥まで肉棒を呑み込んだ。

「おおっ——♡」

前髪を浮かせるほど勢いよく、顔が股間に密着した。

唇のぷるぷる感がサオを一気になぞり、口内粘膜の扱き心地がその後を追う。熱く蕩ける口内のちっちゃさ全開密着扱きに、青年は口を結んで耐える。

「ほらほら……ずるずるあがっていきますよー……♡」

「うあっ、あああっ……♡」

フェラチオゴブリンは上目遣いのまま、囁きをなぞるように唇を引き上げていく。

たっぷり口内粘膜を絡みつかせつつ、舌をにゆるにゆる動かして肉棒を舐め倒していき、唇は肉棒の輪郭をなぞっていく。

唇はなぞった後に唾液の艶をぬらぬらと残しながら、根元の太さから次第に細く、カリ首の凹凸に合わせて形を変え、鈴口周りの傾斜までしっかり窄むことでフォローし——

「……はい、えっちな音♡」

——ぷぼんっ、と。

小気味良い音を立てて肉棒を離すもすぐ、フェラチオゴブリンはこれみよが

しに裏筋を舌でべろべろ舐めたてる。

「うああっそれ、やばっ——」

「駄目です♡ 耐えなきゃ♡ ほらほら、べろべろ♡ 乳首くりくりされながら、ドスケベべろべろえっちいですねえ♡」

「んも〜、おに〜さんったら、やっぱりもう限界そうじゃん！」

相方の楽しそうに囁きかけるのに対して、左のメスゴブリンは不満げにぷくぷくと頬を膨らませた。乳首はしっかり弄りつつ更に乗り出し、青年に鼻がつくほど顔を近づけてくる。

「ほら〜、どうせ無理なんだから！ さっさと諦めてふえらちおしゃせ〜しなよ〜」

あったかい吐息が、湿気もたっぷりいやらしく、振りかかる。

右のメスゴブリンも同じく擦りより、至近距離から吐息を浴びせる。

「だめだめ、もおっと我慢しないと……皆に迷惑がかかってしまいますよ♡」
「そんなのどうでもいいじゃ〜ん、早く諦めて種付けちんぽになつてよ〜」

甘ったるい吐息責め。

乳首はしっかりくりくり責め。

むちむちボディはエロい部分の肉付きだけはしっかり盛っている癖に、お腹ばかりは未熟なイカ腹で、その滑らかさを擦りつけてくる。

どうしようもなく、射精を意識し尿道が開く。

「ずちゅちゅっ♡ べろべろ♡ べろべろべろべろべろべろべろべろっ……♡」
フェラチオゴブリンは挑発的に裏筋に舌を往復させ続ける。

だからこそ、尿道の膨らみにすぐ気がついたのだろう。

「——つぶぢゆるるるるっ♡♡♡」

「あああああっ——♡」

早く射精しろや、といわんばかりに睨みながら、一気に肉棒を咥え込んだ。

「ほら、ピストンピストン♡ 精液超越させてぶぽぶぽぶぽ ♡ たまたまの中で精子がいっぱい煮えたぎっちゃいますね♡」

「どくせちっちゃいむちむちメスゴブに興奮しちゃう変態さんなんだからさく、余計な抵抗しないでよね」

「射精はだくめ♡」

「射精してよ」

「ああっ、あっ、あっ——」

快楽に蕩けた脳味噌がぐちゃぐちゃに掻き回されていく。対照的だが等しく精液を搾り取ろうとしてくる囁きに、フェラチオ音が絡んで訳が分からない。青年はほんの僅か残った理性で射精を抑えようと力むが、肉棒はその分だけ硬く張り詰めて、おくちの滑る感触を一層鮮明に味わされる。

まるで青年の肉棒に合わせて特注したかのように、おくちはジャストフィットし、吸い付き滑る。

気付けば青年は、無意識の内に助けを求めてハクを見上げていた。

「……まさかおにーさんさー、射精したら人間達にとんでもない迷惑かけるの、忘れちゃったりしてないよね？」

ハクは青年を見下ろしていた。

思いつきり、嗜虐的に笑っていた。

「まさかねー、そんな訳ないよね♡ ほら、頑張れ頑張れ♡ いっぱい耐えて

♡

「ぐうっ——♡」

「あれ〜？ 変だねえ、すっごく射精しそうだね〜」
わざとらしく首を傾げると、冷酷な表情が作られる。

「……え、嘘だよ？ 全部おに〜さんの責任なんだよ？ 耳にタコが出来るほど言われたでしょ？ ゴ布林は駆除しろって。なのに自分勝手な偽善でメスゴ布林助けて、挙句の果てに繁殖までさせちゃうの？」

「そっ、それはっ——あっ、ぐっ♡」

君達が襲ってくるせいだろう、と、言おうとして唇を結ぶ。フェラチオゴブリンのおっきな頭が一層熱を帯びて上下している。少し口を開くだけでも気が抜け射精してしまいそうなのだ。

「もしかして〜、君達のせいだぞ〜って思ってる？ ゴ布林を見つけたら殺しちゃう人間さんよりずっと優しいと思うけどな〜♡」

冗談でしょ、と、ハクは笑う。

「私達は、殺すんじゃないんだよ？ ただ誘惑するだけ♡ そりゃね？ 射精したらとっても迷惑かけちゃうよ？ ゴ布林だって増えたら人間殺すし、

色々奪うし超大変。おに〜さん一人の命じゃ償えないくらいの大損害♡」

青年は歯を食い縛って耐えながら、再認識していた。

嗚呼、この子は一体どこまで意地が悪いんだろう、と。

「でもね……おに〜さんが我慢さえすれば、全部丸く収まるの♡ すっごく優しいでしょ？ 平和的解決って奴だよ♡」

結局ハクは、全てを青年のせいにしたいのだ。

敢えて罪悪感を刺激することで、反応をより楽しみたいだけなのだ。

「ほら……だからあ、ぎゅぎゅっと濃縮オナホゴブリンの超絶下品なふえらちお責めくらい、耐えられるよね♡」

だからハクは、わざと良心に響く行為をする。

彼女だけじゃない、それに乗る他のメスゴ布林達も同じだ。

「そうですよ、ほらほら耐えて♡ おくちせつくす我慢して♡」

「も〜、早く負けてよ〜、ちっちゃい子のおくち気持ち良すぎるくせに〜」
空々しいハクの台詞と同様に、囁くことで口淫を意識させる。

もう、世界でフェラチオゴ布林しか見えないほどの淫靡。

四つん這いになって股座を支配するメスゴブリンは、青年を妖艶に睨み上げ、ちっちゃいおくちを総動員して肉棒を搾ってくる。

ただピストンするばかりではない。

唇は肉棒の形をなぞりあげ、不釣合いに大きい怒張を露にする。

既に限界まで膨れて暴れる肉棒を前に、今度は亀頭をこれ見よがしに舌で舐める。

左右にべろべろ、亀頭の艶に舌が滑る快感もさることながら、特に挑発的な光景がえぐい。一切青年から目を離さず、亀頭責めを見せ付けるメスゴブリンのドスケベ可愛いその姿は、射精直前の肉棒にはあまりに刺激的だ。

拳句フェラチオゴブリンは、散々見せ付けてから、再び一気に肉棒を呑み込んだ。

ちっちゃいおくちだからこそその、強烈な挿入感。青年は首筋を逸らせて必死に快感に耐える。

「……はあい、じゃあ今からあ、おにーさんの乳首さんにメスゴブリン達がちゅーしちやいまーす♡」

——射精の欲求が押し寄せる。

どれだけ理性を総動員しても、肉棒が膨らんで抑えられない。

「いっっぱい乳首さんちゅっちゅっぺろされちゃうけど耐えてね♡ それじゃあはっい、カウントダウン開始♡」

「あっ……あっあっ……」

青年の身体をむちむちボディが舐め、そして乳首に吐息が迫る。

「おにーさんは我慢出来るかな？ ♫ ♫ ♫」

青年を見下ろすハクの表情は物語っている。

どうせもう我慢なんて出来ないんだから、射精に乳首舐め、合わせてあげるね♡と。

「はい、じゅーう、きゅーう、はーち」

二つの口が、いまかいまかと待ち構える。

フェラチオゴブリンの頭が、一層激しく上下に振られる。

「なーなーろーく、ごーお……あっれー？」

ハクの台詞に、わざとらしい軽蔑が混じった。

「もしかしてー、もう射精ちゃう？ うっわー……よーん、さーん」

あらゆる要素が、青年により屈辱的な射精をさせる方向に向いている。それでも、青年は抗えない。

心が折れ始めている中での射精など、絶対したくはないというのに。

「にーい……いーち……」

ハクのやりたいことは分かっている。

それでもどうしようもなく、青年は人生で最高最低な絶頂感に見舞われ――

「……ぜーろ。さいってー、しね」

――罵倒と共に喉奥まで肉棒を咥えこまれたその快感に、射精した。

「ああっ♡ あっ♡ あっ♡」

フェラチオゴブリンが、勃起を呑み込み啜ってくる。逃げられない。一滴残らず貪欲に、青年を凝視し喉を鳴らす。

肉棒の脈動が止まらない。



乳首をねっとり舐め啜られて、尿道を異常に濃い精液が通り抜けていく。快感は青年の頭を真っ白に焼き爛らせていく。

「はあい、びゆくびゆく。びゅっ、びゅっ、びゆるる。うわひっどい、これびゅっびゅとかじゃなくてさ、かんっぺきに種付け射精じゃん。孕ませる気満々のやつじゃん。腰浮かせておちんちん喉奥にめっちゃ押し付けてるしい、ちっちゃあいメスゴブボディ押し付けられてえ、ぶにぶにお腹の奥にある子宮と卵子意識してるよね？ 種付け意識してるよね」

射精を冷酷に見下ろすハクの台詞は、背徳をそそる。

「害獣の繁殖助けちゃうよってあれだけ言ったのにい。そもそも異種族感での生殖とか御法度だし。しかも相手は、人間の女の子に良く似たちっちゃあい魔物なんだよ？」

ハクの、青年を見下ろして微笑み、

「……人間としてえ、最低の詰め合わせみたいな射精だね♡」

囁く罵倒に、青年は殊更濃厚な精液を喉奥へと注ぎこむしか出来なかった。

——最低の射精は続いていく。

射精の間中、ハクはひたすら青年を罵倒した。最低、変態、その他凡そ思いつく貶し文句によって、射精する青年を非難した。

その間中、青年はメスゴブリンに群がられながら、敗北感に涙さえ漏らして射精した。

大

蛇

大蛇

危険度：B～A

出現場所：洞窟

知能：普通～高い

特殊能力：神通力

大蛇は深山の洞窟や地底に潜む蛇の下半身と美しい女の上半身が備わった魔物である。その姿形からラミアやナーガの眷属であろうと思われる。他の蛇の魔物と最大の違いはその巨躯であろう。伝説によれば山をぐるりとひと回りできるとさえ言われている。

その力は強大で死と再生や豊穡を司る神として崇められている。

瞳にはあらゆる種類の魔力を秘め、この魔眼に凝視されたものはたちまち彼女に魅入られてしまうだろう。

体液にはあらゆる毒素が含まれておいるといわれ、その力を用いて生物を殺すことも生かすことも自由に行えるという。また、棺桶に横たわる者でさえも奮い立たせる強力な媚薬効果も秘めていると語られる。

この恐ろしく淫らな蛇神は野蛮な神の例に倣うように、生贄を求める。欲する獲物を探し、呼ぶのである。

それは年若い者であることがほとんどだ。生贄となった少年、あるいは少女は強大な力と魅力に心を支配され、この世のものとは思えない悦楽を味わわせながら、生きたままその全てをしゃぶられ、なぶられ、喰らわれる。

それは肉であり、血であり、精神であり、記憶であり、魂である。

大蛇に食らわれた者は大蛇の物となる。

大きな蛇は神の使いとも称される。ではさらに大きな蛇は神そのものではないだろうか。

大蛇と出くわすことがあっても、絶対に戦ってはいけない。触らぬ神に祟りはない。藪を突かなければ出ない蛇もある。愚かさや臆病さが、命を救うこともあるのだから。



下等搾精種

下等搾精種

危険度：B～C

出現場所：墓窟、古代遺跡

知能：なし～低い

特殊能力：エナジードレイン等

洞窟の暗闇にはおどろくほど様々な生物や魔物が蠢き、独自の生態系を築いている。それらのほとんどは視覚的能力が退化している。中には闇の中で光を捉えるために極度に発達した視覚を持つ者も存在するが、音や臭いあるいはもつと別な何かを察知することによって、獲物を捕まえるものが大半である。

そういった洞窟の生命の中で最もおぞましいのは搾精種と呼ばれるグループだろう。

搾精種はその名の通り人間や魔物や動物から精液、並びにエナジーやマナを吸収する特徴をもった生物である。

知性や意思というものは皆無な、本能のみで動く下等な生物だが、それぞれに奇妙な特性や能力を有している。

一度捕まえた獲物を絶対に逃がさない拘束能力を持つもの、獲物に気が付かれずに近づくために擬態するもの、匂いや光によって獲物をおびき寄せるもの、寄生するもの、催淫毒や腐食液を用いるものなど様々で、共通しているのは、獲物に強力な快樂を与えるという点のみである。

搾精種に捕まった者の末路は憐れだ。性器や肛門だけでなく、全身の性感帯を弄ばれ、時には脳を犯され、人外の快樂を味わわされ続け、気が狂おうが、衰弱しようが、命が尽き果てるまで精を搾り尽くされることになる。だが、それは幸運なケースと言っているだろうか。搾精種は繁殖のための苗床や借り腹に使うことさえあるのだから。

尋常の遊蕩に飽いた道楽者の中には、この搾精種を快樂の為の道具にする痴れ者もいるという。快樂の夢は、快樂そのものと同じくらいに、人を虜にするらしい。



闇に蠢くモノ

文 背戸山葵
挿絵 モスクワ



幻想世界魔物大全

登場人物紹介

ジャミル

剣を持つほうが似合う、がっしりした体格の魔術師。先導するタイプで、パーティのリーダー。

マリン

長剣を得物とする女剣士。ジャミルとは幼馴染で恋仲。口も剣も早く、ジャミルとの口喧嘩は日常茶飯事。

ギィ

薬草の知識に長けた、^{ハーバリスト}薬草師のドワーフ少年。
お調子者で、口喧嘩の絶えない二人をよくからかう。

キケロ

歴戦の傭兵。失踪した3人の冒険者を発見するが……。

闇に蠢くモノ

— —

聴く者の心を揺さぶる地鳴りと共に足元が沈んでいく。崩落。その言葉が頭をかすめると同時に、落下は始まっていた。ジャミルは咄嗟に腕を伸ばして葉草師ハーパーリストの少年を捕まえようとしたが、掴んだその手はするりと抜けてしまった。肺腑が飛び出しそうな衝撃がギィの体を打った。だが、仲間の助けで落下の速度が減じたことと、ドワーフの矮躯が幸いしたらしく、深刻な怪我を負うことはなかった。

落ちてきた穴を見上げると、心配そうな面持ちのマリンとジャミルが覗き込んでいた。

「おい、大丈夫か？ ギィ」

「う、うん。平気」

「すまない。もう少し早く気が付いていれば……」

「気にしないで、ジャミル。そんなにひどい怪我はなさそうだから……いてて」

ギイは上体を起こして、腕を鉤型に曲げてみた。痛むが折れてはいない。幸いかすり傷と打ち身だけで、大きな出血も骨折も無い。湿布薬と塗り薬で処置できそうだ。痛みに関しては、オピウムを用いれば感じなくなるだろう。

「少し休めば動けそうだけど、この高さじゃ……道具がないと登れそうにないな……っていうか、ここ、なんなの？」

自分の手当てをしながらギイは周囲の様子を確認した。広いドーム状の空間だ。上方の穴までは小柄な彼の4倍以上の高さがある。松明でぐるりを照らしても、全容は見渡せない。だが、あのおぞましい生物たちの気配もない。壁はロープと柱で支えられてはいるが、かなりずさんだ。梯子かフックがあれば登れそうだが、持ち合わせていなかった。彼らがルイン島の領主から言い渡されたのは浅層の偵察任務だったからだ。

「ちょっと待ってね、今地図を確認するから」

マリンはそう言って地図の写しを繰り広げた。ここは、元々ルイン島の金鉱だ。おおよその見取り図はある。

「えと、そこはちょうど下の坑道の横穴みたいね。遠回りになるけど行けなく

はなさそう……どうする？ ジャミル」

「どのくらいかかりそうだ？」

「下に降りる通路がここだから……そうね、あいつらがどれだけいるかわからないけど30分もあれば」

「引き返して道具を用意してここまで戻ってくるまで3時間ってところだな……迎えに行こう。少し待っていてくれるか、ギィ」

「う、うん。ならのんびり待たせてもらうよ。せっかくの水入らずだしね」

そう言って少年は悪戯っぽい笑みを浮かべた。マリンとジャミルは幼馴染で恋仲だ。青年魔術師は照れたように頭を掻いた。

「ギィったらもう」

剣士の少女は口を尖らせたが、満更でもないことを示して頬の赤い、隠し事の出来ない性質なのである。

「冗談だって。でも、下の階層の調査に成功すればさ、追加の報酬がもらえるだろう？ 多少時間がかかっても、情報は集めておくべきじゃない？」

彼らの偵察任務の一つにはその地図をより詳細なものにすることも含まれて

いた。未知の領域の探索という危険を冒すのは賢明とは言えないが、仲間を助けるついでに多少の褒美をもらえれば儲けものだ。

「念のため、松明の予備を何本かくれる？ 万が一のこともあるかもしれないから」

ギイは笑って余裕を見せた。

—二—

金の算出で名高いルイン島では、大きな異変が起きていた。

金鉱が突然異界と通じたのである。原因は不明だったが被害は明白だった。

地下深くで偶然開かれた“扉”から瘴気が溢れ出し、蟻の巣のように広がっていった坑道を浸蝕した。坑内に溢れかえった見たことも無い生物に鉱夫は恐れをなし、金の採掘どころではなくなくなってしまった。困り果てた領主ボーゲンは、合法的、あるいは非合法的に貯め込んでいた富を頼りに冒険者を集め、ダンジ

ヨン化した金鉱の探索と異界の門の封印に乗り出したのだった。

ギィ、マリン、ジャミルの3人は領主に直接雇用された冒険者の中では一番の新米だった。だが、それ故に栄えある先遣隊に選ばれたのだった。

要するに、使い捨ての斥候だ。情報を持ち帰ってもらい、実力のある冒険者たちがよりダンジョンを攻略しやすくする。思惑はわかっていたが、それでも領主が提示した報酬は弱小クランにとっては魅力的だった。要は、無事に帰ってくればいいのである。

「遅いな……」

ぼつりと呟いたギィの声が茫漠たる暗闇に吸い込まれていく。日も登らない暗闇では時間感覚などあてにならないが、もうかれこれ2時間は経過しているだろう。

二人はどうしているんだろうか。まさか、冗談を真に受けてのんべんだらりを決め込んでいるじゃないだろうか、そう疑いかけて首を振る。ジャミルは羊飼いのように他人を守り、先導するタイプの人間だ。ああ言った以上、きっと

最善を尽くしているだろう。その恋人のマリンも、少し口うるさい時もあるが、俊敏な剣の使い手だ。時々ジャミルに突っ掛かったりはするが、本気で喧嘩はしない。彼にリードされるのを好ましく思っているらしかった。

——大丈夫だとは思うけど、少し心配だな。

ギイは静かに立ち上がった。オピウム香が聞いたのか、痛みはすっかり引いていた。早い処置のおかげで傷口も塞がっている。辺りを調べてみることにしよう。万が一、二人がやられてしまった場合、一人でも帰還しなければならぬ。

ギイは松明に火を灯すと、周囲を警戒しつつ歩き始めた。オレンジ色の光が周囲を照らし、闇を壁際に追いやった。

何が潜んでいるかわからない闇。たった一人先に進むのは、いくらかの勇氣が必要だった。無意識のうちにナイフを抜いていた。

上層部で出会った不気味な生物を思い出すとそれだけで背筋が震えた。飛び掛かってくる、長い尾をもつ奇妙な蟲。人間の乳房と性器そっくりの口を持ったナメクジ。天井から円形の口を伸ばしてくるワーム。人間の声で助けを叫ぶ

ナニカ——。

この洞窟の闇に潜む禍々しい生物の細かな造形は、考えただけで胸がムカついてくる。このウルナが守護する大地には生育しえない、文字通り暗黒の世界から侵入してきた、名状しがたい存在だった。

斬撃や打撃、燃焼によって葬り去ることが可能なのが唯一の救いだろうか。

ギィは地面を這う小さな芋虫を小さな麻袋に追い立てると、口をきつく締めた。手に残る感触について表情が険しくなる。異界からの流入物は、持ち帰れば研究材料としていくらかの金になる。冒険者には多少でも銭が必要だ。

上層部とは異なり、周囲の地面は緑色の苔に覆われ、内壁や岩の上には毒々しい色彩の奇形のキノコや、巨大な地衣類が生育していた。異界の門に近い分、侵蝕が進んでいるのだろう。周囲の空気は冷たいが湿気が多く、ほのかに甘い臭気が混じっている。

ギィは迷子にならないよう右手に壁が来るように闇の中を注意深く歩いて行った。そうやって二人を探す傍ら、出来るだけ小さなものを選んでキノコ類や地衣類を採取した。中には汁を吹き出すものもあり、手袋の上からでも汚染さ

れそうだった。

念のためにパオオニヤの葉と石灰石を口に含んだ。成分の染み出した唾液で口を濯ぎ、少しだけ嚙下して、残りは葉っぱと石灰とまとめて吐き捨てる。口の中が皺まみれになったように苦かったが、これでいくつかの毒に対する抵抗力が上がる。

何もなければいいけど——それは二人に対する心配であり、自分の運命に対する願いでもあった。

「ジャミル、マリン、いつまで待たせるんだよお……」

急に心細くなり、闇に向かって呼びかけたが、小さな声は反響することも無く、暗闇に吸い込まれていった。

怖かった。だが、不思議と少年の足は止まらなかった。

ふいに、ギイは森林浴でもするみたいに大きく息を吸い込んだ。無意識の動作だった。

さっきの甘い匂いをより強く感じた。果実の饅すえたような、鼻腔に絡み付くような臭気だ。それは進む先から漂ってくるようだった。奥に——あるいは手

前に？——進むにつれて、匂いは濃く明確になってきていた。香木や香草の類ではない。けれど、いい匂いだ。

足取りが覚束なくなっていたが、少年自身はまるで気に留めていなかった。壁伝いに歩くうちいつの間にか、坑道に入っていた。先は、二又に分かれていた。

ギイは何も考えず、左の道を選んだ。まるで吸い込まれるように。左側から匂いが漂ってくる。濃くなってくる。口の中が粘つてきた。歩度を速めたわけでもないのに、少年の呼吸は荒くなっていた。息が上がっているのではない。性的な興奮が高まっていた。

「はあ……はあ……なんか、すっごい、ムラムラする……」

前かがみになりながら、追い立てられるように甘い匂いを追いかけていた。ズボンの中で、性器は痛いくらいに張り詰めていた。

「催淫効果だ、これ……はあ……くう……」

昔、師匠の葉草師のところまでこっそり試したカーマの葉と同じだ。性欲を増大させ、射精したくて、やりたくてたまらなくなる。パエオニヤでは身体の免

疫能力が強化される分、ホルモンや神経への作用は余計に酷くなる。

（今回持ってきた薬草に中和できるものは……うう……ちんちん我慢できない、射精したいよお……くっ、ダメだ、考えないと……鎮静効果のあるオピウム香で酩酊すれば……でも、こんなところで動けなくなるのは致命的だ……）

パンパンになった股間を抑えながら、急ぎ立てられるように歩いていった。性的衝動と対処法の考案で少年の頭は一杯で、どこを通ってきたのかさえ思い出せない。

もし周囲に敵対的な生物が存在していれば、今の彼は格好の獲物だっただろう。だが、それは幸運ではなく、偶然でもなかった。

やがて、坑道の先に何かが見えた。巨大な丘のような物体が、闇の中で自らぼんやりと白く光っていた。動物ではなさそうだが、キノコの仲間かもしれない。一見すれば、それはあるものに似ていた。いや、今のギイには、そうとしか見えなかった。

「なんだこれ……お尻、なわけないか……ううう……だめだ……」

それは、人の臀部にそっくりだった。それも、むっちりと肥った成熟した女

性のお尻を極端にデフォルメしたような、肉感的でいかがわしい、魅惑的なヒップだ。

見ているだけで、そそられた。ごくりと唾をのみ込む。

光におびき寄せられる虫みために、迂闊に近づいていた。先ほどの甘い匂いは、いよいよ濃くなっていった。その物体の周囲では、ピンクがかかった霧として視認できるほどだった。物体の下部には漏斗状の突起がいくつも並んでいた——まるでデフォルメされた乳首のような——それが、呼吸するように、ガスを吐き出しているのであった。

(こいつ、匂いで僕を……おびき寄せて……)

畏だ。鈍った頭で理解するが、強力な催淫毒は逃げる気力さえ削いでいた。ふらふらと誘き寄せられながら、濃く強烈になった臭気を深く吸い込んでいた。息をするたびに、甘ったるい匂いで鼻腔に膜ができそうになって、脳の奥がじんじんと痺れた。欲情に火照った血が、全身を駆け巡っていた。

近くで見ると、その表面は脂ぎったような艶めかしい光沢を帯びていた。尻のように盛り上がった部分の真ん中には、垂直の割れ目が走っている。それは、

ガスを吐き出す動きに連動して、呼吸するように収縮していた。その度に、乳白色の外側とは裏腹な、生々しいピンク色をした内側が垣間見えた。

(これ、お、女の人の……なんてエッチなんだろう……)

巨大な尻そっくりの物体の真ん中にあるピンク色の開口部——それはもう、女性器にしか見えなかった。ギイはそれを一度だけ過去に見たことがあった。薬草師の師と湯浴みをした時に一度だけ。どんな感触がするんだろう——無意識に指を伸ばし、そこに触れていた。

「うわっ……！ な、なにこれ……指、食べられる……!？」

指先が触れた瞬間、肉孔が食らいついてきた。まるで意思をもった生命体であるかのように蠕動し、ぐじゅぐじゅと音をたてながら、皮手袋の上から指をしゃぶり、奥に引きずり込んでくる。内壁にはヒダが幾重にも刻まれており、それが指を揉み込んでくる——!

「ひわっ……」

驚いたギイは慌てて指を引き抜いた。慌て過ぎて後ろによろめいて、尻もちをついてしまった。見ると、手袋は透明な粘液で濡れていた。粘度が高く指で

触ると糸を引いた。生臭い匂いがした。指にはまだ内部の触感の余韻があった。
(も、もしここに……ちんちん挿れたら……どうなるんだろう)

にゆるにゆると蠢く穴にペニスを挿入したら、ヒダだらけの柔らかな肉にしやぶりつかれたら、きつと、いや、絶対気持ちいい――。

そう考えた瞬間、その考えが頭から離れなくなった。誰の目もないのにキョロキョロとあたりを見回し、松明を投げ捨てると、ズボンに手をかけた。

官能の匂いはさらに濃くなっていく。

「はあ……はあ……こんなの、エッチ過ぎるよお……」

そんな迂闊な行動は命取りだ。このキノコらしい物体が、なんなのかもわからないのに。そもそも、今は二人を探している途中だ。待たないといけないのに。こんなことをしてる場合じゃない。

頭の中でそう考えながら、ギイはズボンを脱いで、下半身を露出させていた。少年の肉欲に支配された心は、それが罨だと勘付きながら、快感の魅力に抗うことはできなかった。

「ううう……ダメな……でも、少しだけなら……」

少年の肉棒からは、もうすでに先走り汁が垂れていた。肉孔は丁度いい位置にあった。肉裂に先端部を触れさせる。くちゅり、と音がして、柔らかな肉がゆっくりと露出する。粘液でまみれたピンク色のそれに触れた瞬間、内側と外側の中間にある、唇のような部分が亀頭を優しく包み込んできた。

「はあうう……あ、あ、あああ……」

柔らかな感触が先端部をむにむにと甘噛みしてくる。ゾクゾクするような快感が、ペニスの芯を貫く。だが、その刺激は心地いいのに、どこかじれたい、焦燥感を募らせる種類のものだった。まるで、早く奥に入ってきて来いと誘っているみたいだった。

「ダメ、ダメなのに……ううう、が、我慢できないよお……」

快楽に渴^{かつ}えたギィにその誘いをはねのけることなど不可能だった。もう、少しだけなら、保証もないのにそう期待して、腰に軽く力を込めた。

「ふあ、さきっぱ……い、いい……」

先端部を肉裂に潜り込ませた瞬間、孔がきゅっ、きゅっ、と収縮を繰り返した。粘液で濡れた柔肉が張り詰めた亀頭をひっそりと包み込んだまま、う

ねうねと蠢動し、敏感な部分をいやらしく揉んでくる。まるで、分厚い唇で咀嚼されているみたいだった。

「あああ……いいよお、これ……ダメなのに、吸われて……」

穴は外側に近い方から順番にうねって、啞え込んだ亀頭に心地よい刺激を与えながら、奥へと引きずり込もうとしてきていた。快樂を餌に、挿入を誘っているのだ。

これ以上は絶対にダメだと感じた。だが、ギイは同時に考えてしまっていた。この先は間違いなく気持ちいい——欲望に抗えない。止めなければと思っているのに、腰が勝手に前に出してしまう。亀頭で閉じた内壁をかき分ける、分泌液でぬるぬるになったヒダが敏感な部分をコリコリと摩擦してくる。

「ひあ、あ……おく……あああ、き、気持ちいい……」

腰が白い表面に密着するくらいまで奥まで突き込んだ瞬間、ギイはうっとり息を深い息を吐いていた。

内部の感触は想像していた以上に素晴らしかった。粘液に塗れたヌルヌルの質感がペニス全体に密着し、蠕動による甘い締め付けを与えてくるのである。



肉洞がうねうねと蠢く度に、複雑に入り組んだヒダが竿に絡み付いてくる。最奥の構造は特に絶妙だった。ドーム状の柔肉が亀頭をすっぽりと包み込み、そこに並んだいくつものイボ状突起が、肉壁の動きに伴って亀頭に押し寄せ、カリ首や鈴口まで丹念に刺激してくるのである。

「ふあああ……すごい、これ……♡」

たちまち腰砕けになっていた。うっとりとした表情を浮かべ、抱き着くようにキノコに覆いかぶさった。マシユマロみたいにくかふかした白い表面に、少年の小さな体が緩やかに沈んでいく。程よい冷たさが、火照った体には丁度良かった。

「ああああ……ああ、あ、あ、あああ……♡」

完全に脱力し、正体不明のキノコに身を委ねながら、ギイは内部の感触に没頭した。催淫効果で感覚が過敏になっていいのか、淫らな構造や蠢動がつぶさに感じられる。そこは、まさに快樂の坩堝だった。挿入しているだけで、少しも動かしていないのに、肉ヒダやイボがいいところを刺激し、快感が毒のようにペニスを浸蝕していく。そればかりか、周囲に漂う淫らなガスが、鼻腔から

官能を刺激してくるのである。女生との経験すら無い少年が、キノコの与えてくれる快樂の虜になってしまったのは仕方のないことだった。

「う、はあ……こ、これ、気持ちよすぎて、もう、もう……♡」

下半身が甘く痺れるような射精感に支配され、熱い欲望の塊がこみ上げてきたと思った時にはもう放出が始まっていた。

「ダメ、イク……もってかれちゃ——あ、あ、ああああ……♡」

はたんきょう
巴旦杏のような少年の尻がビクビクと痙攣する。無意識に腰を押し付けていた。絶頂感が背筋を駆け上り、心地よく脳内に充溢する。肉穴の奥に精液が迸る。するとどうしたとか、あたかも放出を歓迎するかのよう肉壁が収縮し始めた。

「ひあああ……吸われて……♡　こんなの、しらな……ひい……♡」

射精中のペニスが根元から先端に向かって締め付けられ、亀頭部に断続的なバキューム刺激が加えられる。それは、明らかに精液を搾り取るための運動だった。

「ひい……ちんちん、変になりそうだよ……♡」

辜丸から直接精液を吸われているようだった。過敏な瞬間への貪欲な追い打ちに、ギイは鼻にかかった声をあげ、腰をくねらせ続け、その苛烈で甘美な搾精が休止した頃にはすっかり息も絶え絶えになっていた。

「はあ……はあ……き、気持ちよかった……」

荒く息を吐き、キノコにぐったりと身を預けるギイ。性欲の潮が引き、幾分か冷静になった頭には、こんなことしている場合じゃない、という考えが入り込む余地があった。

「二人を、探さなきゃ——ひあああっ！」

ギイは思わず悲鳴を上げていた。半分くらいまでペニスを引き抜いたところ、突如として肉穴が今までにない激しきでペニスに吸い付いてきたのである。卑猥な吸引音ともに肉壁が蠢動し、射精直後の敏感な粘膜に容赦の無い刺激を与えてくる。

「あ、ああああ……なにこれ、なにこれ……!? ひあっ、ああっ♡」

腰に力が入らなくなる種類の強烈な快感。引き抜きかけていたペニスが、再び強引に奥まで引き込まれてしまう。

「ひあ、くうう……こいつ、僕を逃がさないつもりなのか……!?」

肉穴は奥まで挿入された少年のモノを緩やかに締めつけ、充血した亀頭をイボまみれの肉壁が押し包み、マッサージするような刺激を与えてきた。

そのもどかしい快感は強制的に獲物の性欲を引き出すための甘い罠。周囲には濃厚な催淫ガスが漂っている。熟れた果実に似た匂いが鼻腔からじわじわと脳を冒し、粘りつくような性欲を掻き立ててくる。

「ここで、逃げなきゃ……逃げなきゃ……ああ、くうう……あはあ……」

吐き出したばかりなのに、ムラムラとした欲望がぶり返してくる。こいつは、まだ精液という餌を求めている。そのために性欲を掻き立て、快楽を与え獲物を引き留めているのだ。

ギィはゆっくりと腰を引いて――。

「逃げなきゃ、いけないのに……気持ちよすぎて……ああ……これ、いい……♡」

そうして、自ら奥につき込んだ。白いふかふかのカサに抱き着いたまま、背を波打たせ、ぎこちなくヘコヘコと腰をぶつけていく。

「止まらないよお……ひいい……あああ、これ、いいよお……♡」

包まれているだけで射精してしまうほどの肉穴だ。動きが加わるとさらに気持ちいいのは理の当然だった。挿入すれば巧妙に配置された肉ヒダやイボ状突起が龟头や竿を摩擦し、心地よく男の器官を歓迎する。引き抜く際には、その凶悪な構造がカリ首や裏筋に名残惜しそうに絡み付き、纏わりついてくるのである。しかも、肉洞全体がピストン運動に合わせるように、蠕動し張り詰めた茎を揉み込んでくるのだから堪らない。

「んひいいい……あああ……きもちい、うひいい……ああ、いいい……」

男から精を搾り出すためにデザインされたと思えない淫靡な生物がもたらす凶悪なまでの快楽刺激にあつという間に絶頂させられていた。

痺れるような快感が脳を突き抜ける。放出を察知した肉穴は吸引運動を始め、脈動する肉棒をしゃぶり上げ、啜り立て、精液を貪欲に貪ってくる。甘美な心地の中でペニスが溶けてしまいそうなくらい気持ちいい。

「あひいいい……いいよお……もっと、もっとしゃぶって……気持ちいいのし
てえ……♡」

イきたての粘膜を刺激するときの腰が抜けそうな快感に全身をかくかくと震わせながらも、ギイは抽送を繰り返した。止まらなかつた。催淫ガスで完全にキマって、性的欲求は際限なく高まって、睾丸は次々と精液を生産し、ペニスが脈動しそれを放出する。

「おほおっ……でてりゆうう……ああああ……んぎもちいいよお……♡」

トロンとした瞳。開いた口から喘ぎ声と涎。狂喜的な表情を浮かべ、結合部からぐじゅぐじゅと卑猥な音が漏れるくらいに激しく出し入れし、かき混ぜて、貪った。快楽を求めて、機械のように律動し続ける。全ての動きが、全ての刺激が、快感に結びついていた。

「おほっ……ひっ、くあああ……ちんちんがあ……ちんちん、溶けちゃうよお……♡」

絶頂が止まらない。キノコに抱き着いたまま腰を打ち付け、肉穴の奥に精液を吐き出していく。気持ちいい感覚が間断なく脳に押し寄せて、射精が終わったらまた射精が始まる。あまりにも短い間隔で、液体状の快楽が睾丸の奥から強制的に引きずり出されていく。

自分がこのまま精を吐き出し続けられどくなるか。
もし、仲間こんな醜態を見られたら。

他の生物がやってきたら。

普段なら考えうる危惧は少年の頭には一切なかった。

押し付けた腕や太ももが、その白い表面にずぶずぶと沈んでいることさえ気にならなかつた。全てはどうでもいいことだった。

「おあつ、あつ、気持ちいい……あひ、また、でりゆ……とまりやにゃい……
いひい♡」

そこにいたのはもはや冒険者ではなかつた。不気味な異界の搾精キノコの罠に嵌り、その淫らな肉孔がもたらすこの世の物とは思えない快樂に溺れ、命と精を自ら提供する生きた哀れな餌食でしかなかった。

やがて、地面に転がった松明の火が消えた。甘い匂いの立ち込める闇の中にぼんやりと白い輪郭が浮かび上がった。湿潤で淫らな音色と蕩け切った嬌声はいつか聞こえなくなるだろう。



大ナメクジ

大ナメクジ

危険度：B

出現場所：湿った森・洞窟

知能：低い

特殊能力：粘液

大ナメクジとは、巨大化したナメクジの総称である。

生態は普通のナメクジと大きく変わらない。乾燥に弱くじめじめした場所を好み、食欲旺盛で農作物を食い荒らす。いくら体が巨体とはいえ、動きが鈍い彼らが他の生物を襲う事は少なく、基本的には害虫として扱われる存在である。しかし、いざ彼らを駆逐するとなると厄介だ。

全身を覆う粘液は、乾燥から身を守るだけではなく、火の粉を受け流し、矛先を反らす、天然の鎧である。いざ粘液を貫けたとしても、軟体の体のほとんどは筋肉だ。臓器まで刃を貫通させ、致命傷を負わせるのは容易ではない。

中には粘液に毒を持つ、体内に寄生虫を飼うなどしている個体さえも居る。出来る事なら乾燥に弱い、動きが鈍いといった弱点をつき、触れずに倒すのが

望ましい。

大ナメクジの眞の脅威は、餌さえあれば爆発的に増える繁殖力である。雌雄同体の彼らはオスメス関係なく繁殖ができる上、一度の交尾で得た精子を長期貯め込むことができ、生涯に多量の卵を産み落とす。

また、軟体の体はあらゆる隙間に入り込める。よくマイマイと同一に語られ、殻を持たずひ弱なイメージを持たれるナメクジだが、実際は硬い甲羅を失ったのでなく、鈍重な殻を脱ぎ捨てたというのが正しい。彼らの行動範囲は驚くほど広く、人の入り込めない隙間に隠れ、あらゆる場所に産卵する彼らを殲滅するのは容易ではなく、対応を間違えれば大繁殖する可能性がある。

体内構造が単純なせい、大ナメクジは食物に影響を受けやすい。毒草を摂取して体内に毒を貯蔵したり、火炎トカゲの死体を喰らって発火能力を得たり、中には黒水連を摘んでその魔力^{マナ}で変異し、知能を持つことすらあるという。

彼らの生態に恐怖した偏執病^{パارانノイア}芸術家の中には、いずれ知能を得たナメクジが人間に変わり地上の支配者たるだろうと預言する者さえいるが、そんな結末は決して見たくないものだ。



コウモリ娘

コウモリ娘

危険度：C

出現場所：洞窟

知能：普通

特殊能力：超音波、魔眼

コウモリ娘は薄暗い洞窟や廃墟を住処とする下等な魔物である。巨大な耳と翼膜のある前肢を持ち、身体の一部は柔らかな毛で覆われているが人間の女性に似た姿をしており、ハーピーやサキュバスとの類似点がみられる。

飛行能力を有し、聴覚に優れ、暗闇の中でも獲物の位置を正確に把握し上空から襲い掛かる。戦闘能力はさほど高くはないが、魔力を込めた声や魅了や混乱、睡眠の魔眼を使い相手を翻弄する。群れを成す場合もあり、暗闇の中でコウモリ娘の集団を相手にするのは、熟練した冒険者でも危険な行為である。

雑食で果実や動物の肉などなんでも食べるが、中には人間の血や精液を餌とするものもあるようだ。そういったコウモリ娘の集団に襲い掛かれた男の末路は哀れである。魔力の籠った声と魔眼で理性や欲求を狂わされ、暗闇の中で

延々と血を啜られ精を搾られ続けることになるだろう。男の精は繁殖にも用いられ、繁殖期にはコウモリ娘の群れが寄ってたかって男を捕まえ、巣へと誘拐する姿もみられる。

ただし、コウモリ娘は敵対的な存在ではない。人間と同程度の知能を有し、人語を解するものもあるため、相手が少数ならば交渉を仕掛けるのも一つの手である。基本的に憶病で単純なため、強いと認識した相手には素直に従うだろう。



企画・製作 白森書房 トロスタニ

本作品内の画像・テキスト等全てのデータに対して、無断転載・複製・改竄・第三者に譲渡することを固く禁じます。